近桟集

夏

へ利5
1981
2

近栈集第二

よ

よわり所なく　様多くあり

又世頼なり

よしやさは　よしさうな

仕利

ようきくハ　あしくせは

あり

よ縁を　よき事之宜

よ縁い菓　杜冊の事也

よそめい　よそほひ之

よしや志　さらう事也

1981
2

よせおもく　寄重之よせ
かきハえんか
むすひ

ようひ　きさらきの哀賞
乃拙名むりよ
そむなきハり
さりにき也よ
そわひ北云連
なくなるす
とりふし

よそち　よそちハやす
乃りの事之

よ々月　ゆう出月也時分

秋ふよあらす

よもすがら　秋をあかさ
事也

よとゝも　万住のする之

よふとり　うふふ事也

よすがら　たよわし

よと　秋のよとむ所
於り

よ旅へ　我むえんある
あつわを云よ
我のさし

よ流氏毋　唐へ使毋也や
個船をそなへ

らぬこと有利

よしくぞ　由ある事也

よろうりく　世済うき志
くせを付之

よ滝きらわ　同じ事也

よかまき　秋を隠そたる
新古今

よのつね　いつもの事
也為常之

よう〱なく　よとをゝう
鳴也

よきて　よく取之

よそゐて　かそうゐて也

有のこの分限ん

よふく　よ取く也か
之助之

よもそん　世とのこの分く
人之葉門

よ越こゐ　小鳥也夜よよ
ゐは世又情を
云といふ説有
又鳴ともいふ

よこの里　世よ海しらせ
荒里ぬうる也

よしなうせ　也明ますこ

よ承光形玉　夜光乃玉也

よふへのゑ　清儀に蛇あれ
ゆるさし
神社に毬を
おくたまふ氷
也諸神にある
とりてくと鴨の
やまと湯に混す
しよりへ乃水
なむ神によふ
と云んし

よくろ　口に是れ車也

よのきう　よりしぬるし
悪の字し

よとみ草　ふてしこ也や
季草とかくし

よたりの袖　神服乃ん也
花折の衣梅と
云稀ゑ十二月
晦日は績紀奉
那り花折袖し
神人并口に家

よわ　てつきなふ也

よりみ　みこと云之

よ秋乃桂く　清涼殿の手
也秋は殿清寝
而仕之

よかれぬ　夜よ寝ぬ事
よひゐ　宵居也
よひの紙　やまい也の物
と書なり
よそりたる　夢とよみり
たらぬ物也
蓮のまろ寝　うてなきき
乃草庵り寝
するなり
よしえやし　男をいふ也
よるべ　さへりしく事
よなの装　ろうきの秋れす
なり

秋の夜を短き　家とよんへし
てぬまは思人
を夢みるゝ事
よきりなく　ふよこ入みち
もなき事也
よとそれ姿　よみと人出
うる姿也秋戸
出姿之
秋月　後秋れ月なり
秋わさ家月　定行ん仏て
たゝく仏也
よ民のとき　地水火風之

よつ乃たみ　士農工商之

よしのゝ山　大和の國也

よこ山　武蔵にも有

よゑひ人　天子ほえ賑乃時為身一の老人濁酒を奉之

よらのかは　甲斐の外た称山と云依木の中山也よこ杉里くやるとも云色同前也くやれも少勢成色同前祭り

世をうさめ　世の掟なり

よをふふ　よふ那り

よるひ　たねもかね那り

なり

万世のこゑ　大内にて万歳を唱よゑふといふ也

よふこの鴫　肥前松浦のうち也よふこ乃海里と同前

わくかけ　かく成也

よそ旅寝　いまたの事之

よもつの國　黄泉乃名也

よこ川る　帷るく
よりきこの洞　大内のすゝ
よれ乃錦　せん明なり
よとの　寝所之御殿也
夜ふけて　世もくろかまての
孫なうな利
よきれ祢　天祢也大和國
ふあり
よ里あまよ　けふはもくま
てと云ふ之勝
乃字本也
よら連志萬　萬れ母なと
ふよらまゐる

車ふ也

た

たく海く　立と云ゐす之
まく八玉字也
どろり弓　ふきりするゆ
みこえ米弓之
どうか海き　色をゆこの
ふきまとこ
たふ海しき　たくましふ
又堪忍をまし
ふ那り
さ分き　河原よ高く棚
とりきた板の

たむけも
神供をそなゆ
るなり
誰りと也とハ
羽乃助へ

たぐりあひ
よれきまわ
うまれて縁也

たまきはる
むまへハ命也

人姿なり

たそかれ
暮かたき時分の
事也

たれとき
同たそかれ時

たまれを称
なり
うゝ称也

玉ハかめなる
二色となり

たかこひ
てぬくめ之

絶入みくり
志ほり事也

たりつき
表こる古書

たふ
手なる

たりまと
色好人風流也

たもと
髪かもの髱家

事也

たゆけなる
わち女まひ

海邊に似之

たひ志河原
うらうらにて

人なてのゆき

なかみたるを
このはかせいふ
又妻をおもひ
恋みと同意之
たまづさ　よハきんせ
たまはゝき　たはゝきて也
云草ノ掃
たくあしぶ　たはしきるを
うつりきせ
玉かつら　たかつら也た
髪ハえくしく
せみ女のうん
さしとをいふ

玉のを計　かゝるゝ也
たまのきつこ　葛を云之
玉柏　たまの愛せ又
露れ物かく玉
たる形を云之
たゆらのる　惜財乃す也
又めてたきす
有利
たわまめ　侮しあつね
之風流女之又
たま続する女
ともあり
たま遊女　同風流詩と書

七夕つめ　七夕つま也
棚なし小舟　ちいさき舟
なり
玉むすひ　たま志ゐを結
ひとむる也
たゆふ　うらくんあり
さうき　たよりとなる
気なきハたよ
りなきあり
たまかこ　みちの利
たまきすう　稲をかをす
形の又余きた
まろと云事也
又たまとハきさ
里ふる所にて色
男まさほめた
ふんなり
さうちを　ち也たらちめ母
乃車也
たゆまん　をやまぬ形り
たまえ芦　芦乃若葉之
玉江芦とく
たまさき星　明星之
たまひま　紐と云玉男也
さう　たく鷺あり
たまりしも　石を云あり

たたく
たゆまむ
たくち
たむく
たよつん

うつくしきの
忘えともいふ
白拍子なり
たえむう縁之
あそふものなり
風流也
直乃字之たん
てきれすう之
佛神ま詣まうで
するといふ
仏法の名れこ
とくいくせん
のたきれ方之

たゆくしけ　許へくして
　こ奈り
たのりの膚　つりを田よ
　おけも思方ふ
　向なり
たのり持　のさ見ま持
　とけるこ事之
たまの男　をん玉のこし
　くなり
たまの人　玉人之鷹尊の
　羽なり
たくん　九俗之流人を
たひしかえう　下鵜の仏

竹の丈古　伊勢にいはき
乃丈のすゝ
たつ乃都　都丈乃すゝ也又
吉野の名所也
たつ乃山列　七月二十八日
小巣をたかぬ
たつなり
たま繞め　傾城の事也
たまさか　まれなる事に
たつのおとしわ　女たつと恋家
すせたつ妹駈
たとり紛　翁りに海よふ
あふ猿く

たみかさ　民百姓乃事也
たまさ　主人の梯の勝
みき抱く
たゆまり　死人をとふす
秋のこと
たりけ　み狩の車也
ふけ　器をとも云獄に
たかくとり　隠くくとし
すせ棚界と書
たちろ　たつ名もあらふ
所あるたかし
さるなり
たつの車　天子乃車也

たひやつ穂　穂とゑく九穂乃ゆる事と云　わらふ事く

たけ川　神なり　河内国の名所也大和とも云

たるしハ　濱古之

たむ南　歓喜利

たえやすく　たやすくく

岩の戸　非名所たまの口といふ也

たく鞣　手ぶ海岸を云　也又毛をとりゆ

御車也

たまよ浦　合浦の山玉

悪ハ去古ハ来　玉ぶり

玉海不　女乃へそとて　そく海く来之

たつた姫　秋をよる神也

たくりの綛　糸のまよ墨

たむけ乃神　道祖神之世　俗ぶさへの神　と云祭り

たミうる葵　ぶまめる羽之

竹川なり　催馬楽のうた

ひ抱かり
玉のうてな　玉座也天子
乃座所なるを
いふ也
たくなわ　糸をよる縄也
たえまれ　ゆたんさする
あら浪なき
たけくいさむ　猛卒と書之
玉のありか　魂魄所也
たハくしまき　絶しく志き
なまよみの　滋厥之泉劇と
云なり
なけかひて　我乃なけのか

とおもへる之
たをやめ　婦人と書なり
誰名をしき　惟名惜之
たまとの　死人至所也
たまのきは　岩のえしせ
所ハよ河こを
竹のうてな　神前ニ五薩
とす宿用之
玉のえた　玉枝とて蓬莱
又小たりこを
又称る乃木之
玉乃なる木也
たなばた姫　七夕なり

玉津の翁の歌　河内なる宮
たけかり　本は子と云す
たのられぬ　此名高きに
唱思ひよそと
こゝもち鶴葉羽
玉箔乃姫　琴乃(?)也銘
紫高岸山へ
たりかゝる　納涼のために
夜ぞ繁つゝろ也
秋なる之
たもいく　まくらなされ
紅有る也袋之
さろみ　当時なる時乃

氷之在たつミ
此いふ也
玉きれあれ　玉よ似たる也
たちられ　とちしたる也
玉くしけ　あつき乃名也
たるひ　らおりの揺氷
たミの草　い孫之民草
たり殿　後うくも也月
本花よ高麗之
玉くし乃景　掛ける
玉のこゑ　揺衣のする也
たくふま海　よくきぬ之
唐織あるまや

たぢからの神　天岩戸より
神を引出りみ
也大和城郡に
あるかミなり
たきはひめ　天照大神乃
娘なりけり
神と成也
たまこめて　玉くまの事
玉のちり　雪く玉蕊
たるみの　たまり水也津
乃國にあるく
垂水と書
たくし　神より重指を名
おやきて女を
うらみはなれ利
たりはの山　石見乃國く
高角山と書
たりはの宮　難波の宮也
たなうき山　石見の國よ
あり
玉裳の座　大臣之関白
殿は宿直ふ参
給ふ所也
たけひめ　かくや姫也月
乃文乃天人之
竹の葉　酒の名又酒乃

ちやしに竹の
氣を仕て
たけくらべ　云處也
たつたひこ　男て立田姫
俗秋也
玉乃以川　天台よ玉れ
玉まくら　泉と云山あり
くもれ氣の手
をまきあつを
云也四月て
たふみく　戀乃車也
たむろする　えやくよ
むけるて

たまうさ　竦りう分戴垣
世北称祇
たおえ　竹乃氣也あ壱
おあぁあり
たをや　小舟の一名て
舟ありう漱付
さるなり
鷹れ忌りひ　急度へ入さ
海水りふすせ
莫ふ里
なみだ　座為ふ悪すを
まはりつけて
称ゝよ東想ふり

宮古板也

たけとりの翁　かけとり　世にある古物語之

玉ちるなり　たましぬれ　ち流程之

玉のいつき　よく里世源　氏にあり

宮遠りくれ　夢羽之等こめ　同名之

玉きまくる　抄ひへ抄と　ろくす里法くし

御乃文　云葉あり　吉野の事し

玉苑　あう迷なり

たぬきさひ　田の家なま　又小異乃すな　云山田代さひ　ともあり

たりひて　頼なる

たみあへて　湛いてあり　てあり

たつのと繩　鳴声生利

岩ゟ彩ハ　山の尾之

たのてらを　帝王の法す

たりひめ　あり宮照　なめ恵と恥て

車より出るを云
遣し人なと

たての　我野也林なる
所なり

たちの麻岩　三吉野よりの
かむしと云石
なり

たよしめ　女のよはく
とよさ事也

たち縫の衣　衣を立縫し
衣なり

たのみかな　新院之天子
乃たりほせ

たまのつ海　女之妻也恋
乃魂とも

竹乃その　親王の名なり
竹園

玉の村菊　物語の名之

たをり枝　手ふかけくえた
となり

玉の灯　玉を光よ色能
灯なり

たふて　流ふて也石也

たく凡鳥　あつ流く多之
鷲をく小飛

若海之孔羽
羽造飛之

鷹とき　午乃刻ゟおハ
たかハもの鷹　小鷹を使也　え世鷹之
玉ひこ　こたま也
七夕乃をして　始てれ契乃
東之下天
玉手乃岸　住吉のきし也
玉ての水　秋升ゑ之
たく火枝　汁湯ハ附のり
行氣也
立乃馬　天の駒之なるの
まともはり
たまき海　女手ゟ拵入

玉少て仕掛之
玉椿ん　手枕とさし
ちんさる也
たのたみ　たうたあまえ
未
まいふま未なり　掛りふま
たまえ例列
まいなゐ　わつらふ心之
まい人　よのつまれん
おまも
まんよける　輩れ了之
ま了毛毎う　毎女なり
う

そくとせし　そな粍ふる
世りみあられ
るすあり

宅色と絲　そうさハりし
きんなり

ぞんみとそ　ゆゆまにさ
らえとはんし

そう涼い　一族の事せ

そくひし里　うえそくう

そうひ　えいあり
山乃かくこう
なる雨し

そうきく　かさくふり感
雨ま咲きくせ
又賞菊とも云又
承和きくとも云

そ衣迷木　風なとにふき
うへ木なり

そよ　そよく品形り

袖清く　水清くんしま

そて　とかうもん
色さ袖續と書

そして　俗ま卒てなと
いふ言ふ語也

そのこ由　秋禾名なり

そこたし　そ志感也

そさうなる　如在乃ふへ
そゝろ　すゝろと成ふせ
そ得まのあれ　たてふまぬ
さるわり
そうろうし　たりなう
そうしと云ふへ
そかゆる西　細西代採也
そきためて　そき板もり
てあり
袖あひ月　七月なり
そみうくた　山わし也
そ也と　家とかを云へ
楚々や　そよといふ仏

せみされたふ
とゆふ仏せ
そのかミ　を時せむし
をといふ
そことうち　そこりうへ
袖ほくすミ　人のなら家
人の事せ
雪色ノ紙　紙文の唐織へ
うかゆ　ぬまるゝすせ
そゝたき　たき物の事に
楚うらてふ
それのあぬり　ひうし又字所
なかにはうのよ

そま人
こゝ海なり
材木をとる人
それ物
仕利松人
鷹のふける
すなり
そよく
木草に風吹て云
すなり
そひへつる
きんそなる
山をいふなり
そえ
山乃かさうえ
なり
そしそ
それこそ
そも同前也

そをたよ
それをたふせ
そひらしき
地なうし
くさ乃えらぬ
すといふこと
そこひなき
そこそこなき也
ひハ玉字之
そはえに詠
あゝ詠なり
あゐまる也
そこ
こゝ語なり
人をさきしむ
そろさむし
とりたるさ乃
立かす之
そもん
そまたとなり
心あり

そきて　物と有略する
事にしそ
きてともあり
そのしれ　雲のみさまに
そめいろ月　八月乃すなり
染色月
そめ文乃山　をこせんに
そ海のさ　山形ニ北松人
備前利
そろぬ　ぞそくそろく
其流ふ井に
染やのさ　そめ物すり所
本来

うくすり　くろ事に
その加兄山　りみとゞけ
うるへ外山ハ
賀茂山なり
そうぬほ生　海とくふハ
忌ねなり
そのうミの親　佛也一切
衆生皆是吾子
とまし
そよたく書　其儀なり
そうひ旅く　りんそく乃
たれきんに
そたく　中村に旅す

そり　雪乃上ニ乗物
乗り
そみたま　ゑ酔也
そゝくさ　たくしかぬ
んありふ揺か
揃へ里あけ　雁ぬ旅形り
子なとい
なまあくる也
揃へて　露そらく
ある日ハ忌と
色ひりん終き
もとうぬおき
袖か天女と　清原下主
吉野ニてのす
ともかり
そよみとも　住吉三座之
そてう菜　名てしこ也
そせりの園　清出之
揃れ花　伯翁花を云也
そち緑田　一町の田之
袖つき衣　糸の錦ニて洗
きうるうて也
洗ぬて　川
手洞之弁箇い
もんため也
つと　洗みち掏之土

老と書也
は迷く　さひしきすこし
みうらはくな
うる事也
はくをかこ　老人のりみ
作利
ついま川　毎いまつけり
はとふおくれ　紅とくお
くる形り
は乃よりた　維之のうま
ね乃を無常也
はりかくふ　ふりく思す
有生無常く

はりのまへ　ときれ昌也
せの男と云
はや菱の宅　夜八あさく
露こをり月　十一月也
つまん見る　雄鷹乃ゆふ
せいと見るく
翅たまる　こし也鷲
露むすひて　菴のすこう
みて後拙やを
ぶりさるかり
つきよめ　月なきをかそ
ゆるく月よみ
同事也

つみいひ　下臈小のふ飯
之包合と書
つきあひ　宴とかく之
月よみの宮　伊勢外宮の
事あり
つきめし　秋京市乃官ヱ
任せら気司合
清さ乃歌　月家厳れ事之
つまたき　月をいふ
色もうろぬ
ろすゝみん乃
おきぬかさ之
川かみ笠　梅れ花ま積合

形つきゝ之
はいむむ　香ふせの如く
う車之
つくりゑ　墨でさ乃上を
さいしきれ云
さいしきゑ也
川ふし　つ穢なしとま
を略するせ
つきいち　大和國の名所
樣市也
つるとみ衣　黒色之墨ま
服を染也
はいかの秋　十二月晦日、

つまあと　乃秋みかり

ついきり　常のことし也　ねつきりなる

つまりか　あら孫之　陸揚と日本紀　よ刀くさり

津しやう　おとくし義　せみけしく志き　方にも用つしなき　とえて海としらう　ねらく浪りを用

つへたましく　つへく　志あて人にく

つた凡　さうれ称なり　ぬさけさりの　ちんすることし

津ふさい　法心にあふ也

津りまりん　奉公人なり

津りひちる　水鳥のつひ　ちかれ之一番

月のて志か　月出さ海よ　志ほさを取り

つりひさ孫　使器量とせ

津ち車　荷をとてこ梅　車なり

つまりうす　ふ常也

つましはし　みの不審成所
みれんそしはしを
すりせつましかし
ともいふなり
墨のをくし　たくしの
てなり
つまひき　琵琶くちえて
はめんそ引手
つききき　琴くさ奏り月
箏ハ枕也
つかひき　嫉妬よりいた
承りて足よ
纓を付る事

あるなり
月さ終い　月白あらる
事之於月代
ときそりたる
はらとり　腹乃あし
丸なり
つきくしり　方便と書せこ
悔やりにと云
つまみけ　のきらし乃称
なり
つぬきり　つりぬくりと
積白虹貫日之
つきとけ　解家なり

つまどの 六条院今万寿寺也釣殿

つまをみきぬ かりハ兄より先よ切ぬ地なり

はつもみ とくりと云木なり

つえいもち 杖の気を合て中に飯および葛を入てその端を切てゆひ結之

つはえ 得る杖也

はくるの園 競窓のすゝ也はくるの路を同じ之

露とり草 いりの気の露に七夕に手向の哥を書之

つやく こしのふと云 こく淡也

つきりまふ はくりぬす とう為ふ之

はかの石文 田村将軍石ふ日本中央と書なり

つ摂の地 つきたさ於

をするせ
つる乃はやし　佛入滅の
所を鶴乃林
九くもれ　もつしきん
みのくと出
月待　を待事也
つとりり　志ひてこつと
おりふ日あは
きどふせ
ついあめし　出家の法之
冬はゆあめし
ともいふせ
はとむり　奉公なり

つくし孫　ゆかり
つちえり　末孫也
つちくも　人の名之身短
足長也　秋武天
王法字乃人也
てあもせる　いしたち浅
云也又慶せ不
つかきこい　あをましに
せぬんなり
月弓うさふ　秋未之
てくつえき　枝乃志けな
猿形也
はかすミま　俗よりかはる

なと云なり
月よみの秋 春月ハ明秋なり
月のたゝち たんてきれ
車なり
月のひゝく あさらかせ
秋月閑秋之山
赤なり
津る乃け衣 鶴乃毛衣よ
似たる也
津くみぬ 去乃若水のす
露のくゆ 露のうけ之
つまこゑ 鹿と人ふいえ

世我八のさえ
ーを浮く云也
露のむへなき 月もやと
らぬものなり
つけ枝 さくらなり
つまし草 せりせ
つなゝく つまひらり
なり
津の母らし 服豆と云之
つくら とくら之
つやうなゝく きらく掃
除するなり
つまなくゝ つまなくゝ小

くきなり

つき人男　月の名也桂男

月よみ男　月乃名之月よみともいふ

月よめた　月とりおんた秋なま

つふま石　つふて石之

つらく　多雷なり

つもく　無れうちさせ

つ婦らぬ　歸うる井之

つふ布め　むなうをいふ

つ川そ菓　尾花之露拙菓と書せ

つまさせ　きりくさの名なり

つきこ菓　萩な利

つ乃字へ　催馬楽律字之

つまや　妻向乃家なり

つくしみ　造物ふ之

月たえハ　㐂の乏月ふみえ合て見ふる

つみへ　苗乃雛

つらめ　新女成佛乃す

つく見菓　たんほゝ之

つめれなま　肥後の國乃名所なり

つるぶたち　両方よはの
毛流つき也
つ穂かしき　筆形也
孫
孫け　孫よ祈る孫匠
小付て中を云
孫たかまき髪　髪乃艶ある
手也
孫の山の原　七夕に手向
乃糸なるを
孫ひらり　篠山の持病法
のらり也
孫ちけ人　素意ある人也

孫たま遣し　さるまじき
ご縁なり
ねひまそ　孫かけなる祈之
孫くさまき庵
回参也
孫ひさる　とくのびさる
ひねひりとも
云捫約と書也
寝ての孫声　孫てのあし
たなり
孫ひとつ　一類をゆよふ
孫と子一
孫もそ　草木と孫ちて

をきしく
地を仰ふ所也
をりそせあり
を笹云秋蝶ふ
わら玉吉老よ

嵐ハ峯
惡すを数句也
あかこのしと

を緒の月
いふら語し
あつかの月也

を里二雲
子待月
としの外庭在
すすと云し練
云けり

をね不同覚
おひうし
ぶすハ同を覚
きと云也

をうら萩
萩ハ孫ふ風猶
なき浅はあり

をのら草
ときた色

をね山
山乃孫のすゝ

をあして柱
草木を根引
みしてうへた
、気た利根く
て同家也

をよその鐘
物和の鐘なり
たゝ根之ろハ

をろ
助也あを孫ろ

せ云かさ

嵐乃社　日吉の社にて
祢く　祢也祢宜あと
ともあり
祢さう　年に三度さん
しと仕すせ
祢つこき　祢こ海きさて
こくき時日か
祢り乃村戸　つまとの雨
くみあまた
な　あると云て
かまめいふる　かめさる

事あり
まれ人　けふしまん人也
祐大夫也なと
くく人と同す
なよらへて　たくなてせ
祢こかれ　うくくるすて
かのなく　なんちりかく
祢り汝呂
なきぬ　やりらく心て
なめし　ひんれぬなり
世猿ともなめ
おふといふも
同事て

な迄　その迄なり
ながつき　九月なり
なるさか　なるこ付る
さかせ
なけの情　まこと乃なき情
なさけなわか
なかのらふ　かくいきるし
なりまて　わかれてすと
いふなり
なこに思人　人なみよ思
へいせ
なきえひ　世れをとひ
の事源氏よ云

なよく　薬字やなうこの
なきなよなう
ともいふし
なよひの　なと拙なしん
似なよひ也罷
の字也
なたり　平字なりうき
なきう緒し
なつきひ　しむけひなゆく
ふなりなつさ
なみた云し
なのそし　禁中にて長階
なり

なやらふ　追儺の事也
なごし　六月晦日祓
する事也
なみ物　いろちの事也
唱物あり
一 なごやか　あうう成物
也やはらかし
なほざり　とふりんなる
車あり
なびく　さきうふるす
世草木人なを
ある事也
なよ也姿　うつくしき姿

な海ら波　なましいの心
きし也
なそのたち　とりあつかひ
三種人嫉
なのむる　詩文を忘いを
及世詠
なかり　おもうけの物
車なれ利
なかなかしいひきりける
羽あり
なつしき　さきさむら
事也
なた　海河落合所也

なかめ　久かゝ雨之霖
雨をいふ
なかやり　やゝらうり也
なまめき　艶云と書女れ
　君か妻
なか神　天一神の方ふさかりの方之
なさけ人　情さく也
なまくし　よきかとの
　車也
なかや　中宿也中屋
なふりしる　鞍馬寺に有
なたくれ　名あり立也

なゝのを　和琴第二ノ絃也又十三番め乃をとも云
なゝもり　七川をかけ之
なゝの車　七車形り
なゝなくみ　なゝぬみと云流之
なけ　なし形り
なのめ　ほのつま世
情なくる　うちへ小情有
　よしを絶なり
なこみ川　わりかさて
　世和字之

ふるれ羽　なほさり也ふ
いつしろと云
中川　京極川二条よ
里上をいふ之
なほえん　いろは四十八
字と云ふ也
かうとかれも　とふとかく
よしと云んて
ふくさみ草　たくふくさ
ミの事也
なきさ酒草　なふきれまて
合草の附名也
とりお也八雲

ふさ葉とい之
あのま未　流人乃まゝ也
ふよ行　かそくよき身
〳〵　行幸あり
七わたの玉　蟻通乃明神
糸を通玉七ま
うり那り
えてあふを　をしふへてふ
らをなり
ふこう　うつくしくな
めらう成也
なりさた　中比えさた心
と同んあり

にま濁　なまれとさせ也
まなるけ　羽く衣ふも否　雪山童子半偈乃こと也
かへたみ　衣乃かへたみ　たる形り
なゐり　くうふと云詞
なよまれ　蘇ま祉のん否　也かよ為形同
かゐく　なましぬこふ
なもく　みみく乃ん　なんなくこ
かて物　弟ふ連乃物也

にほ鳥　たうゐ几奥　缘同系老こす示　にほ代否為也虫　物と書
なふりしの嶽　大峯天迦　の名け也花香　ふ淺間乃た本　とりふせ
にほ　虫衣にの宝
なふしおふ　ゐまたのた　ぬ也名頁
にのりそ　藻のこすこ袮　馬篭を云

なしつか　大内乃庭のす
なつむ　はりまなりふ
くたひ迷ふる
なり
なげきこり　歎のひまなき事之本よ
よわんふるゝ
菱をくろを　菱と紋よを
くろうそなり
なふやうやと
云う海之
なとり草　ふりみくさ杜
丹の事也

波なりしえ　海中乃岩ふ
付たる貝也
なん　下知之ゝたなん
ゆるとふん也
なつ引乃糸　麻乃事之
ふ川そ内ふ
夜川の白糸　是ハ夜子の
うし子形ゟ
たゆきふ　様となり木之
なおろ　萬ふ見風ふ
たちて其川乃
うち孫あ事之
ならく乃庭　地獄の名也

にてしこ　庚夜をいふ也

にゝの社　山王七社也　三

妙寿川井之

なよ竹草　芦竹異名也　難

波草

にほ乃業を　にさりし　うひしろせ

なつさひ吹　風の名之

にほきの山　摂津にあり也

なあし山　土佐の名所之

莫越山

にほとり　湊之追門也　鳴

門難波門明石

乃門となし同

にけの花　情れむ也にさ

にへの柱木　有乃中と略之

柱木乃七重

の宝物也

湊乃水すミ　係の涓平負

女りせしすへ

にの氏衣　女乃てこふ也

沖衣

にめしくし　くちり

なるみかさし

有明の心之

につりし鳥　うくひす也

なにはのあし　名所也浅り
山に對して乃
すゝき利
なかの連枕　すかとりの云
新居り
なき連衣　破れ損ずる衣
なかれ年　年乃行す冬之
なごりのよ　北の法の物乃
を形り
なる　海乃車之
なまゑく露　酒乃名也
なつりし草　ふてしこ之
夜ゆき草　卯花なり

なつらをうとつるを云
なのうへ　苗乃穀なとく
云な八の名也
中さなのもち　中比乃事
書すき
なま海乃　なま海ハ生也な
海く發之
なふりし乃念佛　引聲の
阿彌陀經也
なのとこ　宅れ名之
なちはの社　いきなきれ
當社と成名之
なほさゑあの葛　いさなみ也

能よいさ有りさ
信濃の秋と
成あり
みをきこ　玉ろく氏名の
えりハなり
みえのり　海草也縄乃こ
とく成こ有也
なきれあり柏　名草のたく
ひあり
七草のたゝ　七瑤那り
七川こみ鏡　くゝの人名
小舟し鏡也
みつまち乃泉　酒のみすく

みくりの湯　信濃乃名所
みを
なすこ松　加賀の國乃名
所なり
なまのの秋　夜まあり
名香き吉野　名ハ西白と
香り名所吉野
と書なり
みさえみく、平等のてらく
ら
ちりたく　かおくと志
さるんせいを
ちくえよう

くまらぬせ
らくそく　上臈しまんえ
らう　廊る里
らい—　ぬ里拇お乃姫
たまあ波のけ
菓子徳む飛之
らん乃かなせ
らみの苑　らんれむあり
蘭苑と書て假
あり尤むと
みて用
らてん　くひをうる之
らちをゆふ　うをい路亦

那り旅嫁
ろさはなる　くへしほう
なる那り
らのゑうし　きぬ乃名之
みす拘れすせ

む

崇乃庭　大内の車之
むさしひ　香れ飛せ
霊乃ともおし水薫まあ
を傾城之
むとく　水の上むとく
空あり
むこふ　野をれまます之

むはらう　いまのりうせ
むと猿いたん　らりれた　歯服
らんと云ふこ
忍孫摺乃衣　ー孫ろされの
孫ふてをまほ
衣を云なり
室の八嶋乃煙　下野の國
野中乃水氣者
ありふ似たる
をいふなり
むぐら乃宿　荒たるを云む
ぐらの門同分

ふおりー海を
大湖淋也
うち玉姫　衣と同す之離
宮夜毎ー通
猶と也又信吉
ともあり
うすらきいて　口を渋か
め眉を乃弟
邪祇也
うつえ　春宮門へ卯杖
まひらなこ
うまや乃おさ　たひ乃あ
亟ー也驛長

上書

うちへ　几帳有之

うゐかうり　元服の事也

うふとたま　うふ子宮た

・　ふなり

うれしこ　海あとなり

うしろく　うらおもてに

くけ里

うらうへ　表裏なり

うるひね　畫扇乃小松也

うきつこはむ　いふとく　舟に云なり

うけひ　誓をいふ也

みなうら　湊の西なり

うしかさも　ましめと

うらきらし　云ふ緑之　きさ海なり

ふるふ　おなり

うたく　うちる世　情世人云ひて　ともゑうさて

・きなまこしと　云ん小色用之

うちへなき　なさけなき

うの江ふ　なり　うかうふせ

うけひく　承引ありとさ
りふ車せ
うつらの　祟なり新木也
うかれめ　傾城乃事也
うらとくる　囲あひうる
車有利
うとむ　とうりん乃す
うまご孫　そせ孫へせ
うち雁い　こほりと落氷
うすむ染　うち江の家也
うそぶく　言ふきんを
狂事なり
うき世の岸　世界のす也

うきの川　天川なり
う塊舵　古乃内裏の江
うこの月　くも事を績
うめきうる　ふけくん也
うまの雪　卯花之うつき
うち雨　の花同
羅宇也て重卯
蕗と似きる
・りのめなり
うき花余　みへきすえ
落余
う宗く　呉うなせつく
昔く同

うきまのふ　まうきうせ
うみつやこ　於父のあす
海類
うら志海　人の居之浦也
うち乃花薗　宇治也秋草
　うき花合草は
　くし目
海やまあはる　海ハ塩ひ
　て山ハ生きね
　と云加く生死
　世常乃たとへハ
うなて　海の名なり
うの花月　卯花白く月

不似より
うくゑ　盃乃名なり
うふさうし　うふりしあ
　ら也那り
うけもりて　めそひとひ
　かるへ大世積
　頼と云んし
うつ抱　ひつ抱あり
うち山　去作乃名所也
　配所那り
うたの山　石見此名所之
うきまの鴫　えそう鴫也
海の姫玉海　海面墨する

きしむなり
うけふ蛙　六位なり右近
　ふさをいふ
うみしめのこ　わりきす
う浪さ波　卯月又月ふ立
　波をいふ日向
　魚乃るすまや
う津すミ縄　大工乃墨汁
　わなり
うらうし　風の名なり
打霞し消雪　あうさくを
　至あるなり
うさ猫の鳥　氷鳥也

うつふさ　うれむき也
うつ入　うつしハ為に
　さうなり
うまやく　いゑやく
　と云車之
うなゐ乃杖　越中卯坂明神
　せまつり男
　志さ氷数雑女
　を神主りおく
うへなう　うけこうあり
うすのむらけ　氷口祭よ
　幣串ふ大豆をつ
　ぬきて五也又冠乃

かざりに花とさす
残すと云 鞍馬山
にうすき桜と読ハ唐
よきたるのうき
里にさきを春
う源氏男 未然儀を離さ
相男しむらの
男子仏ナ利
うき津ら 人丸の墓泊瀬
へ来るし
うさぎ河 宇治川なと也
うそらき花て さらむふ弟
し 毒なき

うら思 屋とありふせ
うつさ海 よのつきれさ
海しうらし人な
うら待を除 占待居之
うとむ 疎しうとしな
うへのさ様 うらみひを
承る年なり
うつゐ丸 中天河とせ
う宗延 いさなきれ号
飢て乖とあり
ー居之
うらゝや 妻子らゝめな
あり

うちつ枝　足といふ
やしはご孫　對やなりて一
こゝめくる閣舎
をいふ
うはの社・氷藏なり
うちひめ　多乃名之こと
ともあり
うす花　うすしれむ也
かさねせ
うはこゑ　海あとの花し
蹴乃うちうれ
花なり
うとの葉　麻の葉し

うつて　なまりの也
うけもち乃神　家の神之
うすめ乃　天照太神よ勢
なし神あり
萬姫　かくし姫之
うされる　駱馬也
うつ乃山路　業平りの山
よ里都へみ云
傳しせ
うたまく里　酒責女之
うきかさ　水乃泡なる
うきのまつけ　位ふよ里
てうきと云地

を冠よ総名也
うたく　おほふこゝろ
うたせ　むなしき淋し
うはせうひ也
いゑ里
うしろみ　海こし乃ん也
後見なり
うゐとの文　内典外典之
ぬ
ぬて紗　さうひ切也
思ハなひ　京田舎けて
住たる里
ぬるのひうる　田舎めきた

糸なり
ぬその玉水　かゝる涙なん
志ほされす也
井なし　居なき様事也
ぬるさ乃とも　十月ぬ月よ
もちを含む是
を用まは人也
井乃こ雲　病よ也
ゐなかの九の此
く黒くまる
なり雲と云也
ぬての下帯　あさぎき女
小男とせし

常也女ハ須き
花と不忘也

ぬりわ志あし　いもの血
とみて女の男
ふぬる他娃と
物事あまハ
落あり

ぬたち　居ぬけ也

ぬやしく　うやしく敬之

井ひり乃祢　祢武天皇吉
野八佐幸乃時
井の中光之池
の祢乃ひり城

たかし竹ふえ

の

のとこ人　猟師と云野乃
狩人なり

乃まれさろ　慕風めくえ

のとこの　志川りあ於ん
也棠

乃もりの鐘　の中乃水之
程高

のとせ　せんさん也野
接と書なり
接と書なり

乃つさ　のさりひええ

のやま 山乃さうひ又営れすがあり世をのかまで山林よ訪ん之

乃ら 野箸と書せ万葉よ菜れ字をのらと讀又野原なり

乃ちりて 抱毎ゟりれひゆくえし

のり弓 源氏よ主天子弓場殿ゟてはらん正射手小御会をは

車あり又ら色里あるしとてますゐるかさ酒をおして振舞なり

のりもち うけ抱れ手を云賤也菊をかるくうけ抱とけるなり

のーひとへ 綵さるひとへ乃絹かを

乃わり舟 夕の袖せ後の舟やまちく海舟なり

のさき乃使 清廟八陵名
代乃勅使也
荷前使七月十
二月歳暮也乃
さ紀の荷前を
清のすゝき 清皇后を
久ふを松 採たりける
松之葉を同分
野も里草 荻家り
のくさ 乃不住海をゝ
さ那り
のりをぬ むかしくなる
をいふ也

のそき 野乃清くきせ
の多ふ草 たちちかゝ之
乃へれむま 経緯名多き
のき語うつ 羽をお打也
一説ニ野きえ
うつおき
乃みし 佛名れ尊師也
野外と書
のゐ 野のかとり也

近枝集寸二之終

一

壽昌園山人